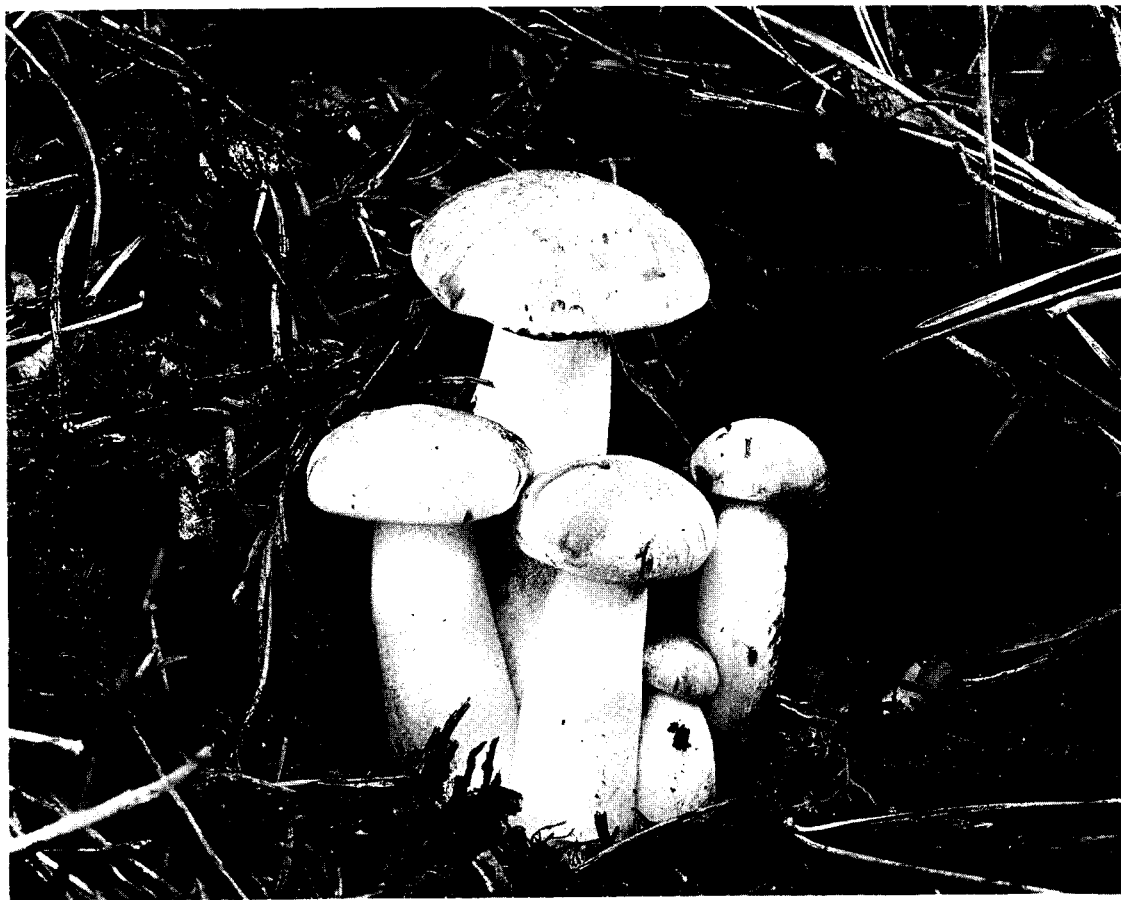


関西菌類談話会会報

1996年1月 No. 17



目 次

表紙 [ホンシメジ]	三東 英幸	1
ベニテングタケとバナジウム	桜井 弘	2
韓国菌学会採集会に参加して	川上 嘉章	5
キノコバエとキノコ	石崎 宏矩	7
1994年度活動の記録 (下半期)	事務局	10
表紙によせて, 編集後記など	編集委員会	16

ベニテングタケとバナジウム

桜井 弘

はじめに

ヨーロッパ博物学は、古代ローマ時代にプリニウスによって、約2万個の自然的事物が37巻から成る「博物誌」として編纂された時をその源流としています。18世紀になると、フランスの博物学者ビュホン（1707～88）に解剖学者ドーハンドンらが協力して編纂した44巻から成る「博物誌」へと受けつがれました。一方、18～19世紀のドイツでは、アレキサンダー・ホン・フンボルト（1769～1859）が南アメリカ北部や中央アジアへと旅し研究を重ね、自然地理学と生態学の基礎を確立しました。これらの博物学および自然地理生態学は、ヨーロッパにおける近代自然科学を生み出すための巨大な土壌を築いたと考えられています。すなわち、自然の観察と把握、そして積極的な自然への働きかけをなくしては、今日の自然科学や生命科学の発展はなかったといえるかもしれません。

これから紹介する「ベニテングタケとバナジウム」も、フンボルトの思想の流れにそって得られた知識の一つであります。ここでは、なぜキノコとバナジウムが結び付くかを紹介します。しかしその前に、私達にとってあまりなじみの深くないバナジウムについて少し歴史的に解説したいと思います。

自然の中のバナジウム

バナジウムは、ご承知の周期表の中にあられる元素であります。バナジウムという元素は、原子核の外殻に、s, p, dの3種類の電子を持っているため遷移元素とよばれる元素群の一つです。この元素は、地殻中には平均135 ppm ($\mu\text{g/g}$)の濃度で存在し、地球上で21番目に多い元素として知られています。スウェーデンの化学者・医師であったゼフストレームは、スウェーデン産の鉱石中にバナジウムを発見しましたが、同時に先にのべたフンボルトがメキシコから持ち帰った鉱石中にもバナジウムが見出されました。ゼフストレームは、古代スウェーデンの美の女神バナジスに因んで、バナジウムと名付け、この名前が現在でも使われています。

生物の体のなかにバナジウムが初めて発見されたのは、1911年の事であります。オーストリアはインスブルック大学のヘンツェが、海洋生物であるホヤの仲間の一つに高濃度のバナジウムを検出しました。ホヤのすべてが、バナジウムを濃縮するとかんがえるのは誤りですが、ごく少数のホヤは、血球中に40～60 ppm、つまり海水の100万倍近いバナジウムを濃縮していることが知られています。しかし、なぜホヤの仲間がこんなに多量のバナジウムを血球中にもっているかについては、現在でも何も判っていません。

一方、海洋植物の海藻中にもバナジウムが発見されています。1984年、ドイツはボン大学のビトラーは、褐藻 *Ascophyllum nodosum* 中にバナジウムを含む酵素としてプロモペルオキシダーゼを発見しています。この酵素は、海藻中の有機化合物に、海水に含まれる臭素イオン (Br^-) を結合させる反応を触媒しています。

その後、バナジウムを含むプロモペルオキシダーゼは褐藻のみならず紅藻や菌類からも発見され、自然界ではかなり広い範囲で見出されることが判ってきました。さらに、興味深いことに、バクテリアの一種である *Azotobacter vinelandii* 中には、空気中の窒素分子 (N_2) をアンモニアに変換して固定する窒素固定化酵素ニトロゲナーゼが存在し、これがバナジウムを含んでいることも見出されています。

自然界のバナジウムで最も不思議なものは、石油中のバナジウムでしょう。原油中には、産地によって含まれるバナジウム濃度が異なっています。したがって原油中のバナジウム濃度を測定すれば原産国が判るといわれています。原油中のバナジウムは、窒素原子4個で構成されるリングをもつポルフィリンという大変複雑な化合物中の中心にはまり込むような形で存在しています。なぜこのような形で存在しているかはナゾですが、太古に生存していた動植物中に含まれていたバナジウムが、長い年月の間に微生物の働きなどにより、このような形になったのではないかと考えられています。

一方、ヨーロッパでは古くから、ある種のキノコには異常なほど多量のバナジウムが濃縮されていると知られていましたが、ドイツはチュービンゲン大学のバイヤーらは1972年にはじめてドイツ国内で採集したベニテングタケ（図1）からバナジウムを含む分子量が415の青色の化合物（錯体）を得ることに成功し、これにアマバジンという名称を与えました。これについては、後に詳しく述べることにします。

以上簡単に紹介しましたように、バナジウム元素の発見、ホヤ中のバナジウムの発見、海藻中のバナジウムを含むプロモペルオキシダーゼの発見、そしてベニテングタケ中のバナジウム錯体の発見は、すべてドイツの自然科学者によるものでした。これらの諸発見は、ヨーロッパ博物学そしてフンボルトの自然地理生態学の上壤の中で達成されたものであり、人類共通の貴重な財産であります。これらの知見はヨーロッパのみならず、アメリカや日本をはじめ多数の国の研究者によって受け継がれ新しい研究が展開されています。

バナジウムの重要性

先に述べましたように、バナジウムは遷移元素の一つであります。自然界では、5価のバナジウム(V^{5+})が最も安定な形であり、 V_2O_5 、 NH_4VO_3 、 $NaVO_3$ として存在しています。これらは黄色をしているため、かつては道路標識の黄色の目印として使われたこともありました。5価バナジウムが一電子還元を受けると、4価バナジウムとな

り、 $VOSO_4$ や $VOCl_2$ の形が存在しています。これがさらに一電子還元されると3価バナジウムとなり、 VCl_3 などの形で得られます。

これらのバナジウムは、蛍光灯やテレビなどのブラウン管の色素の材料として、また先端技術を支える物質、たとえば半導体合成の材料などに用いられ、現代科学工業には欠くことのできない物質であります。このためバナジウムは、備蓄すべき最も重要な材料の一つに挙げられています。

キノコの中の金属

キノコには、金属イオンを吸収し、結合する能力をもつ上や腐食質と広く接して生活しているため、まわりの環境から金属イオンを取り込み、体の中に濃縮していることは容易に想像されます。

キノコに含まれる金属については、ヨーロッパを中心によく研究されています。これまで分析された金属は、鉄、銅、銀、亜鉛、バリウム、水銀、ヒ素、カドミウム、ニッケル、セレン、コバルト、セシウム、ウラニウムなどです。どの金属がどのキノコに多いかはまだ系統的に調べられていませんが、ごくおおざっぱに見て、カドミウムはハラタケ属のキノコに、水銀は、キンメジ科、ハラタケ科、ホコリタケ科のキノコに、そしてマンガンはスッポンタケ、ヒカゲタケ、サルノコシカケ属あるいはサンコタケ属のキノコに、それぞれ高い濃度で取り込まれていることが知られています。バナジウムについては、ベニテングタケ *Amanita muscaria* がよく濃縮していることが、およそ50年ほど前からフランスで知られていました。

ベニテングタケの中のバナジウム

バナジウムを濃縮することのできるキノコは、テングタケ属 *Amanita* の中でもベニテングタケ *Amanita muscaria* などのごく限られた種類のようです。ベニテングタケ中のバナジウムの平均濃度は、40～400 ppm ですが、他の種のキノコのバナジウムの平均濃度は約3 ppm といわれています。バナジウムのベニテングタケへの取り込みは、モリブデンなどバナジウムと比較的によく似た性質をもっている金属イオンが共存していても、影響を受けないことが知られています。

原子番号23のバナジウムは、天然には原子量51のものが100%で存在します。バナジウムは4価の酸化状態で存在すると、d軌道には1個だけの不対電子が存在することになります。この電子が

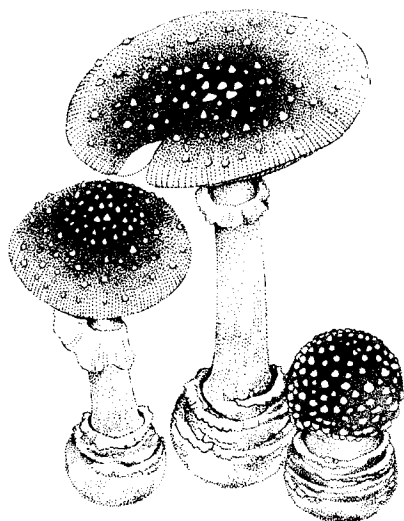


図1 ベニテングタケ
[画：丸西靖忠]

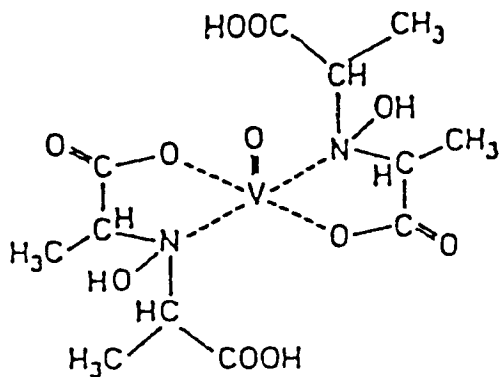


図2 最初に提出されたアマバジンの構造

バナジウムの原子核（核スピン7/2）と相互作用するため、電子スピン共鳴（ESR）という測定装置にかけますと、8本線から成る巾広い信号として検出されます。このESR法を用いてベニテングタケ *Amanita muscaria* 中のバナジウムを追跡し、1975年にはじめて青い粉末が単離されました。この化合物はアマバジン Amavadin と名付けられ、図2のような構造が提案されました。しかし、その後も詳しい研究が続けられ、また一方では化学的に合成する手段がとられ、図2の構造は誤りであって新たに図3の構造が提案されました。図2のバナジウムは、まわりの5個の原子と結合していますが、図3の構造では8個の原子と結合し、大変変わった構造をとっています。この構造については、まだまだ議論の余地があり、本当に天然から得た青い結晶についてX線構造解析法という技術で構造を解析しなければならないと考えています。

日本のベニテングタケ

我々の研究室では長年バナジウムについて研究しておりますので、我国のキノコ中のバナジウムについて深い関心をもっております。そこでテングタケ科キノコ約20種についてESR法を用いてバナジウムが濃縮されているかどうかを調べてみました。その結果、バナジウムを含むキノコは、ベニテングタケとコタマゴテングタケのみであることが判りました。また調べたほとんどのキノコは鉄を含んでいること、銅とマンガンを含んでいるものと含んでいないものがあること、さらに同じベニテングタケでも採集場所によってバナジウムの含有量が異なっていることなど、興味深い事実が得られました。

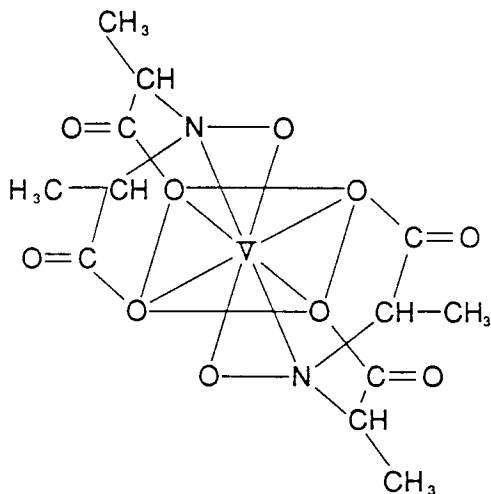


図3 訂正されたアマバジンの推定構造

なぜバナジウムなの？

なぜ我々は、バナジウム、そしてキノコのバナジウムについてこだわっているのかを最後に述べたいと思います。この変わった元素バナジウムは、ラットとヒヨコなどの実験動物については、必須微量元素であることが1971年に明らかにされましたが、我々人間についてはまだよく判っていません。

比較的最近になり、実験的に糖尿病にした動物にバナジウムを注射すると糖尿病が治る、すなわちバナジウムはインスリンに似た作用をもっていることが見出されています。そして我々は、ある種のバナジウム化合物を経口的に与えると糖尿病が治ることを見出しました。インスリンに依存する糖尿病の治療には、インスリン注射にしか頼れない現状から見て、バナジウム化合物を治療薬へと開発していくことは極めて重要なことと考えられます。

ベニテングタケがなぜバナジウムを濃縮しているのか、またこのバナジウムはなぜアマバジンという錯体の形で存在するのか、さらに、この錯体はベニテングタケにとってどのような生理作用を持たせているか、などはまったく判っておりません。しかし、我々ヒトの立場から見て、ベニテングタケの青色のバナジウム錯体はインスリンに似た作用があるかもしれないと期待されます。

ベニテングタケ中のバナジウム錯体の含有量は、極めてわずかではありますが、我々にはできるだけ多くこのキノコを採集し、その中から青色錯体を単離精製し、正確に構造を解析したいと考えています。そして得られた結果にしたがってその錯

体を化学的に合成すれば大量に得ることが出来、したがって動物実験を行うことができるであろうと期待しています。

この度、本会報にこの記事を書かせていただく機会を与えてくださった横山和正先生に、またベニテングタケの絵を描いて下さいました丸西靖恵先生に心からお礼申しあげますとともに、本会員の皆様からベニテングタケに関する情報と収集に

ご協力いただけることを願っております。

(〒607 京都市山科区御陵中内町4

京都薬科大学、代謝分析学教室)

参 考 文 献

- 1) 桜井 弘, 田中英彦編: 生体微量元素, 廣川書店, 1994.
- 2) 桜井 弘: 化学, **49**, 992, 1994.
- 3) 桜井 弘: ファルマシア, **31**, 595, 1995.

韓国菌学会採集会に参加して

川 上 嘉 章

今回は、広島きのこ同好会として表題の採集会に参加する機会を得ましたので、その様子を紹介いたします。

1995年7月13日出発当日、広島空港での放送で、ソウルの天候が悪いので福岡空港へ引き返すかもしれないというアナウンスが流れると、参加者30名の顔が少し青くなり、さながらアオイヌシメジという感じでした。案の定、ソウル上空の窓の外はガスがかかって真っ白。着陸の時は緊張しましたが、滑走路に降りた時はほんとうにほっとした気分になりました。

採集会は14~15日、ソウルからバスで東へ約3時間行った江原道原州にある雉岳山(ちあくさん)で行われました。韓国菌学会のメンバーは約30名、日本と比べて盛りあがりにやや欠けました。観光地でもある亀龍寺周辺の植生はチョウセンゴヨウ、チョンセンソモミ、アカマツ、コナラ、ナラガシワ、アカシデ等で、採集されたきのこは105種類、そのうち学名と和名がつくものは67種でした。韓国側の同定者は金養燮、洪仁杓、石順子各氏でした。韓国特有の種類についてはよく分かりませんでしたが、日本でも発生が少ないといわれるウスキシガサタケが2日とも別の場所で採集されたのが目を引きしました。ニンニク臭がするきのこがありましたが、このきのこはニオイカレバタケで、この種特有のにおいでした。その他、カメムシタケに近縁な冬虫夏草、アカチャツエタケ、キュウバンタケ、キショウゲンジ、クサウラベニタケなどが採集されていました。

食物で印象に残ったのは、赤い色をした激辛の

おかず、野菜・肉・唐辛子みそ・ごはんを自分で適量まぜて食べるビビンバでした。日本に帰ったら、おかずの味がうす味でどうにもならなくなるのではと思ったぐらい印象的でした。

韓国では日本のように各地にきのこ同好会が存在することはなく、こうしてわざわざその同好会が訪れてくるということが驚きのようにでした。日本の場合、多くの同好会は野生きのこを食する目的で入会する人が多いと思われそうですが、韓国ではそういった習慣があまりないように見受けられました。

訪韓した頃は、事故(橋の落下、ビルの崩壊)の暗いニュースが流れた後であったり、自民党W氏の発言問題に対する韓国内での抗議運動が起っていましたので、無事帰ってこられほっとしているところです。

以下が、学名と和名がつく、採集品のリストです。

(〒731-02 広島市安佐北区三入東2丁目31の5)

Ascomycotina 子囊菌亜門

Discomycetes 盤菌綱

Pezizales チャワンタケ目

Helvellaceae ノボリリュウタケ科

Helvella macropus var. *macropus* ナガエノ
チャワンタケ

Basidiomycotina 担子菌亜門

Heterobasidiomycetes 異担子菌綱

Auriculariales キクラゲ目

Auriculariaceae キクラゲ科

Auricularia auricula キクラゲ

Dacrymycetales アカキクラゲ目
 Dacrymycetaceae アカキクラゲ科
Calocera viscosa ニカワホウキタケ
Calocera cornea ツノフノリタケ
 Eubasidiomycetes 真正担子菌綱
 Aphyllophorales ヒダナシタケ目
 Cantharellaceae アンズタケ科
Cantharellus cibarius アンズタケ
 Stereaceae ウロコタケ科
Stereum gausapatum チウロコタケ
 Polyporaceae タコウキン科
Polyporus alveolaris ハチノスタケ
Laetiporus sulphureus var. *miniatus* マス
 タケ
Oligoporus caesius アオゾメタケ
Coriolus versicolor カワラタケ
Trichaptum abietinum シハイタケ
Fomitopsis pubertatis ホウネンタケ
Fomitopsis pinicola ツガサルノコシカケ
 Hymenochaetaceae タバコウロコタケ科
Inonotus xeranticus ダイダイタケ
 Agaricales ハタラケ目
 Pleurotaceae ヒラタケ科
Lentinus edodes シイタケ
 Tricholomataceae キシメジ科
Laccaria amethystea ウラムラサキ
Clitocybe odora アオイヌシメジ
Lepista sordida コムラサキシメジ
Gerronema fibura ヒナノヒガサ
Macrocyttidia cucumis クリイロムクエタケ
Collybia neofusipes アカチャツエタケ
Collybia iocephala ニオイカレバタケ
Collybia dryophila モリノカレバタケ
Collybia butyracea エセオリミキ
Marasmiellus candidus シロホウライタケ
Oudemansiella platyphylla ヒロヒダタケ
Marasmius pulcherripes ハナオチバタケ
Marasmius maximus オオホウライタケ
Marasmius purpureostriatus スジオチバ
 タケ
Mycena pura サクラタケ
Mycena stylobatus キュウバンタケ
Mycena epipterygia ナメアシタケ
Cyptorhama asprata ダイダイガサ
 Amanitaceae テングタケ科
Amanita vaginata var. *vaginata* ツルタケ
Amanita soredia ツルタケダマシ
 Agaricaceae ハラタケ科

Macrolepiota procera カラカサタケ
Agaricus campestris ハラタケ
Agaricus subrutilescens ザラエノハラタケ
Lepiota cristata キツネノカラカサ
Lepiota clypeolaria ワタカラカサタケ
 Coprinaceae ヒトヨタケ科
Coprinus comatus ササクレヒトヨタケ
Coprinus disseminatus イヌセンボンタケ
Psathyrella candoliana イタチタケ
Psathyrella velutina ムジナタケ
Psathyrella piluliformis ムササビタケ
 Boltitiaceae オキナタケ科
Agrocybe praecox フミヅキタケ
 Cortinariaceae フウセンタケ科
Descolea flavoannulata キンショウゲンジ
 Rhodophyllaceae イッポンシメジ科
Rhodophyllus rhodopolius クサウラベニタケ
 Gomphidiaceae オウギタケ科
Chroogomphus rutilus クギタケ
 Boletaceae イグチ科
Suillus luteus スメリイグチ
Chalciporus piperatus コシヨウイグチ
Pulveroboletus ravenelii キイロイグチ
Boletus erythropus オオウラベニイロガワリ
Tylopilus famosipes アイゾメクロイグチ
 Russulaceae ベニタケ科
Russula cyanoxantha カワリハツ
Russula sororia キチャハツ
Russula sanguinea チシオハツ
Russula mariae ニオイコベニタケ
Russula foetens クサハツ
Russula laurocerasi クサハツモドキ
Lactarius subzonarius ニオイワチチタケ
 Gasteromycetidae 腹菌亜綱
 Nidulariales チャダイゴケ目
 Nidulariaceae チャダイゴケ科
Crucibulum laeve ツネノチャダイゴケ
 Lycoperdales ホコリタケ目
 Lycoperdaceae ホコリタケ科
Calvatia craniiformis ノウタケ
Lycoperdon perlatum ホコリタケ
 Phallales スッポンタケ目
 Clathraceae アカカゴタケ科
Pseudocolus schellenbergiae サンコタケ
 Phallaceae スッポンタケ科
Dictyophora indusiata f. *lutea* ウスキキス
 ガサタケ

キノコバエとキノコ

石 崎 宏 矩

キノコバエこと始め

1983年、広島大学原爆放射能医学研究所大澤省三教授は、名古屋大学理学部教授に転じた。大澤博士は令名高い分子生物学者であるが、アマチュア昆虫分類学者としても著名である。名古屋は博士の生地であり、少年時代の思い出の採集地への再訪に胸踊らされた。ただ博士は車の免許証をおもちでない。名古屋近郊の山々への公共交通機関の乏しさは、博士の悩みの種であった。たまたま生物学教室のまさに隣り合わせの研究室にいた筆者が、これまた昆虫採集愛好家であることが判明するや、筆者の車を駆って共に山野をかけめぐることとなったのである。

大澤博士のレパートリーは甲虫（鞘翅目）である。甲虫といっても、大型で美しいクワガタムシ、カミキリムシといった、愛好者の多いグループには目もくれず、ゴミムシダマシ、ナガクチキムシ、カミキリモドキ等々地味で見栄えのしない、従ってアマチュア研究者の稀少なグループを好まれる。ムネアカホソホタルモドキ *Dilonius osawai* を始めとして、博士の採集品に基づいて記載され、*osawai* の種小名をもつ甲虫は、タマキノコムシ科、ハネカクシ科、カミキリモドキ科、ガムシ科等にわたって多彩である。

博士の最も好まれる採集法として、キノコを探し、それを食べる甲虫をほじくり出すというのがある。キノコを食べて育つ甲虫は実に多岐にわたる。オオキノコムシ科、デオキノコムシ科、ツツキノコムシ科、タマキノコムシ科、ハネカクシ科、ゴミムシダマシ科、テントウダマシ科、ケンキスイ科等々、けし粒大の真黒け、種の判別は実体顕微鏡下の世界というものが多い。博士はキノコをみつけるや、捕虫網の中でバラバラに碎き、中からはい出すけし粒大の虫をみつけると毒びんに放りこむ。そして残りのキノコはボイと捨て去る。それを見て私は、もったいない、キノコの中には卵も幼虫もいるに違いない、飼っておけば成虫が出てくるはずだ、ともし帰ることにした。私の本業はカイコのホルモンの研究で、カイコを飼うためのプラスチックケースは手許に豊富にある。そ

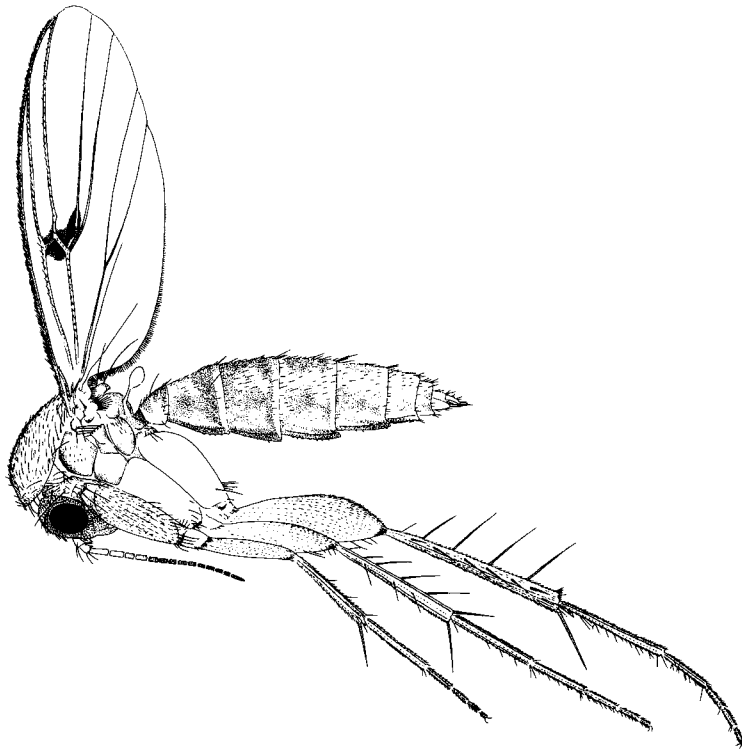
れにキノコを納めて研究室に置き、毎日羽化した甲虫を捕らえては大澤研究室へ運ぶことになった。そのうちに、沢山のハエ（双翅目）も羽化してくることに気づいた。他人へのサービスだけではつまらない、よし、俺はハエを集めよう、ということになったわけである。

今まで知らなかった世界がそこにはあった。何とさまざまなハエ類がキノコをすみかとしていることか。キノコバエ科、クロバネキノコバエ科、タマバエ科、ガガンボ科、チョウバエ科、ノミバエ科、ヌカカ科、ショウジョウバエ科、イエバエ科等々、分類学的に広汎な範囲にわたって種々雑多なハエが出てくる。初めのうちこそ物珍しいので片っ端から採集して標本を作っていたが、これでは標本箱がいくらあっても足りない、また種を同定することなどとてもとても、ということで、たちまち困惑することとなった。

キノコバエへの深入り

そこで双翅目のうちの何か特定の科にしぼらなければ、ただ採集するだけにしても、全く手に負えないということになった。趣味として虫を集める動機は、やはり眺めて美しいということが一番の要素となる。キノコバエ科は翅に様々な斑紋のあるものが多く、胸、腹の色彩斑紋も美しく変化に富み、また脚の剛毛が長く繊細でその配列も得も言われず優雅である。もちろん顕微鏡下の世界であるが。なにしろ体長はせいぜい数ミリの小さい虫である。さらにはとてつもなく種類数が多い。蒐集癖というものは、集めても集めても限りがない、ということが一つの情熱をかきたてる要素となる。そこでキノコバエだけをせっせと集めることになった。

さてキノコバエ科 *Mycetophilidae* とはどんな虫か。分類学書を開けば、その定義は「脚の各基節は著しく長く、後脚の脛節末端には1-2本の明瞭な距がある。翅には中室がなく、第2の基室は外方へ広く開放、C脈はR₅脈の末端まで、たとえ越えてもわずか、云々云々」。これでは厳密であつても素人にはチンプンカンプン。まずはてっ



第1図 *Mycetophila* sp. *ruficollis* グループ (Laštovka, 1972) に属する1種。幼虫はシイタケ、ツキヨタケ等を食する。日本産 *ruficollis* グループには他に、ニガクリタケを好む種、ヌメリイグチを好む種、カラハツタケを好む種などがある。図示した標本は、1994年11月、名古屋近郊で採取したシイタケから羽化した1雄個体。

とり早く第1図を見て頂こう。これはキノコバエ科の中でも最も典型的な *Mycetophila* 属の1種である。属が異なれば形態は多少異なるが、およそそのイメージはこんなものと考えて頂いてさしつかえない。

最近キノコバエ科と呼ばずにタケカ科とよぶことが提唱されている（例えば、保育社の原色日本昆虫図鑑、下）。双翅目は大きく二つに分けてハエ類とカ類に区別され、キノコバエは後者に属するからである。確かにむづかしい分類学上の術語を用いなくても、一見して全体像から受ける印象は、ずんぐりむっくりの蠅の感じではなく、か弱くスマートな蚊のそれである。しかし和名というものには、学名と違って学術的拘束力はない。昔から使われてきたキノコバエの名の方が、何となしに語感的になつかしく、あえてキノコバエの名にこだわっている。こういうことは虫の呼び名にはよくあることである。ウスバシロチョウという美しい蝶がいる。翅は白くて半透明、黒い線條のみで色どりに派手さはないが実に繊細、清楚な美しさで、かつフワフワとゆるやかに飛ぶ姿も優雅

極まりない。低山帯に住む決して珍しくない蝶であるが、その生息地は比較的限られているので、でたらめに山野を歩いてもそう簡単にでくわすことはない。従って昆虫愛好少年は、必ず一度はそれを自らの手で捕らえることに憧れをもつ蝶である。この蝶を一頃ウスバアゲハと改名することが提唱された。分類学的にはアゲハチョウ科に属するからであり、別に存在するシロチョウ科の種とまぎらわしい名はさけるべきとする論拠による。しかしマニアの心情というものは、一度芽生えたものは根強く定着する。ウスバアゲハでは、少年の頃抱いた憧れのイメージは無残にうち碎かれる。分類学的妥当性にも拘らず、愛好者の間では一向にその名は定着せず、ウスバシロチョウの名がいつまでも生き続けている。和名というものはそういうものであってよいものであろう。

さて、そこそこ標本がたまった段階で、京都府立大学昆虫研究室の笹川満広教授に、数十種の標本を送って同定を乞うた。笹川教授は我国有数の双翅目分類学者で特にハモグリバエの分類で高名で、キノコバエ科についても若干の種の記載を行っておられる。戻ってきた御返事によると種名の

わかったものはわずかに数種、他は未記載種で属名のみが記されていた。分類学にうとい私は、手近かで簡単に採集できる種ならば、すべて記載されているものと思いこんでいたのであり、これは驚きであった。小さくて見栄えのしない、そして人間にとって害にも益にもならないこの手の昆虫の分類学をやる研究者人口は極端に少なく、日本のキノコバエの大半は未知のまま放置されている、というのが現状であったのである。

日本のキノコバエの分類に関して初めてのまとまった論文は、岡田一次博士の北海道産キノコバエに関する論文であり、32属65種（内13種は新種記載）が記録された（Okada, 1939）。その後、笹川満広教授、三枝豊平教授等が限られた属について若干の記載をされているが、日本産既知種は、全部合わせたかだか200種前後に過ぎない。果たして日本には何種類のキノコバエがいるのか、笹川博士に問えば、さあ見当もつかん、1000種は軽く越えるでしょう、とのこと。全く手つかずの状態なのである。

そもそもキノコバエ集めを始めるに当たっては、まずは趣味として、多くの種を集めて眺めて楽しめば十分、ということであった。しかし折角集める限りは、何か一歩進んで、生態学的にでも、あるいは進化学的にでも何か少しは学問の入り口で貢献できることがあれば、もっと深く楽しめるといふ思いがあった。しかし何かを論じようにも、種名が全くわからないのでは論文の書きようもない。何かをしようと思えば、その先にまずは分類学に深入りし、一つ一つ名前をつけていかねばならない、ということなのであった。

これは気の遠くなるようなことで、あきらめの気持ちを抱くと同時に、またしめしめという思いもあった。というのは、私は生物学者としての現役時代にはもっぱら生化学ないし分子生物学に傾いた研究に徹してきた。しかし生来ナチュラルストであった私は、新種の記載というものにぼんやりと憧れをもち、一種だけでもいい、死ぬまでには新種の記載をやってみたいとの思いを抱き続けてきたのである。1種どころか、これはすさまじい相手であるが、一つ本気で分類学的研究をやってみようかと思うと、何だか新しく元気が湧いてきたのである。

一つの視点

全北区、東洋区に重点をおきつつ、世界中のキノコバエの分類学の論文を集めていくうちに、一つの論文に強く興味をそそられた。それはチェコの P. Laštovka (1972) の Holarctic species of *Mycetophila ruficollis*-group. と題する論文である。

Mycetophila 属はキノコバエ科の中で最も大きい属で、その中の *ruficollis* グループというのは、第1図に図示した種が属する一つの種群である。翅の中央部に1個の黒紋があること、中脚脛節の腹面に剛毛を欠くこと、他二、三の特徴から他の種群と明瞭に区別される。19世紀前半には多くの分類学者によって、主として体色の違いに基づいてこの種群に属する多数の種が記載された。しかし19世紀終り頃になって、「体色の差は信頼すべき標徴ではない。」とする見解が優勢となり、すべての種を統合して1種とみなし、*ruficollis*（研究者によっては *lineola*）の種小名が与えられるようになった。やがて、現在では昆虫分類学での種の識別に最も有効な手段として常用されている雄の外部生殖器の形態比較が、ようやくキノコバエでも使われるに至って、Laštovka はヨーロッパ、アメリカ、日本の博物館、大学、研究所に所蔵されている *ruficollis* の標本を精力的に再調査し、再び9種に分類しなおしたのである。これらの種は雄外部生殖器形態のわずかな差によってのみ識別可能で、外部生殖器に顕著な形態的特徴をもたない雌個体の同定は不可能とされた。この中には、岡田一次博士により *lineola* として記録され、北大に保管されていた日本産の5種も含まれている。

そもそも昆虫の世界には、姉妹種 *sibling species* と呼ばれるものが散見される。サトキマダラヒカゲとヤマキマダラヒカゲ、ナミテントウとクリサキテントウ……と例をあげれば限りがない。姉妹種とは「一見したところ極めて似ていて見分けがつかず、長い間1種として扱われてきたが、多くの場合生態面ではっきり異なる2群の存在の発見に端を発して、2種に分けられた超近縁種のこと」である。これは進化を論ずる際に、異所種分化対同所種分化の問題に関連してしばしばとり上げられる素材である。広く見渡すと、このような姉妹種は大抵2種から成っており、*ruficollis* グループのように9種もの姉妹種と呼び得るような超近縁種群の存在は異例のことに思われ、強い印象を受けたのである。

生物進化の研究というものは、古生物学的資料を除けば、現存する生物種を対象としての観察、

実験をもとに推論を進めざるを得ない。そして現存種というものは、長い長い進化の歴史の中で多くの種が絶滅して失われたあとの姿を示しているのであって、いわば歯抜けだらけのわずかに残った櫛の歯の残骸から、完全な櫛の歯並びを推定する、といったもどかしさを内包する。

古生物学者の一つの主張に、生物の進化の速度は一定ではなくて、ある時期に爆発的に多様な生物が出現したとする説がある。その爆発的種分化の成因は概ね環境要因の激変と関連づけられているが、分子生物学をかじった者にとっては、DNAの内的要因と結びつけたい衝動がある。過去に起ったような急激な多様化が、今現在いずれかの生物群で起っていないか、もしも今盛んに種分化を起こしつつあるグループがあったとして、そのグループの種分化の鍵をにぎる特定のDNAに変化を生み易いような何かの特徴がみつからないか。DNAにまで立ち入らなくとも、そのようなグループでは絶滅による歯抜けが少なく、現存種についてただ形態学的にだけでも徹底した比較精査を行えば、何か未知の法則を見出すことができないであろうか。*ruficollis* グループは、もしやそのようなグループではなかろうか。

ダーウィン以前にも少なからざる人がすでに生物の多様性をみつめ、進化の概念をボンヤリと頭にうかべていた。ダーウィンは彼らとは比較にならぬ執拗さで多様性の実体を見つめ見つめて見倒し、考え考え考えつめて、真に独創的な生物進化の概念をうちたてた。現代の生物学は余りに細分化し、最新鋭機器の助けを借りねば、大きい進展

は得難いように我々は思いがちである。本当にそうであろうか。自然の現象を見つめ見つめて、考え考えつめて、思わぬ新しいアイデアを得る余地がもはやないと考えるのは、うかつなことではないであろうか。*ruficollis* グループを徹底的に見つめてみよう、というのが Laštovka に触発された想いであったのである。

上記はもとよりひどいヤマカンで、的はずれとなる公算が大きい。現役時代のテーマとするには危険が大きすぎる。定年後の気楽なテーマとすることにして、それまでは材料の蒐集だけに専念することにした。キノコバエを徹底的に採集するには、野外で成虫を採集するだけでなく、キノコを採ってきて成虫を羽化させるのが有効である。その際キノコの同定が必要である。ところがキノコの同定たるやこれ又大変、先刻皆様御承知の通りである。このようにハエに始まってキノコに至るという経緯でキノコにかかわってきたという次第である。(次号に続く。次回からはきのこについての記述がふえてきます。)

(勤務先: 愛知淑徳大学)

自宅: 〒606 京都市左京区鹿ヶ谷寺ノ前町21-1)

参 考 文 献

- Laštovka, P. (1972) Holarctic species of *Mycetophila ruficollis*-group (Diptera, Mycetophilidae). Acta ent. Bohemoslov., **69**: 275-294.
Okada, I. (1939) Studien über die Pilzmücken (Fungivoridae) aus Hokkaido (Diptera, Nematocera). Hokkaido Imp. Univ., Fac. Agr. J., **42**: 267-336 and pls. 15-18.

1994年度 活動の記録 (下半期)

第317回例会 六甲山奥池観察・採集会

日時: 1994年9月4日(日) 晴

35名参加

場所: 兵庫県芦屋市奥池

記録破りの乾燥が続き、収穫は殆ど絶望的と思われた。予想通り採集種(23種)は参加者(41名)より少なく、イグチ科が5種得られたのは意外であった。特にニセアジベニイグチの近縁種と思われる大型のキノコが数本得られたのは驚きであっ

た。これをミヤマイロガワリ (*Boletus sensibilis*) の柄の太い種かも知れないとする意見もあった。

予め、採集品不足を予想して世話人の方でスライド映写を用意し、午後の一時を過ごした。

(丸本 記)

採集品リスト

- | | |
|-------------------------------|----------|
| 1 <i>Gerronema fibula</i> | ヒナノヒガサ |
| 2 <i>Collybia dryophila</i> | モリノカレバタケ |
| 3 <i>Collybia butyracea</i> ? | エセオリミキ? |

- 4 *Collybia* sp. モリノカレバタケ属
 5 *Agaricus campestris* ハラタケ
 6 *Heimiella japonica* ベニイグチ
 7 *Pulveroboletus viridis* ヒメウグイスイグチ
 8 *Boletus sensibilis* ミヤマイロガワリ?
 9 *Tylopilus virens* ミドリニガイグチ
 10 *Tylopilus eximius* ウラグロニガイグチ
 11 *Russula mariae* ニオイコベニタケ
 12 *Cantharellus luteocomus* トキイロラッパタケ
 13 *Clavicornia colensoi*? クラビコロナ コレンソイ?
 14 *Cryptoporus volvatus* ヒトクチャタケ
 15 *Lenzites betulina* カイガラタケ
 16 *Coriolus versicolor* カワラタケ
 17 *Daedaleopsis purpurea* ミイロアミタケ
 18 *Truncospora ochroleuca* ウズラタケ
 19 *Fomitopsis pinicola* ツガサルノコシカケ
 20 *Calocera cornea* ツノフノリタケ
 21 *Hypoxylon truncatum* クロコブタケ
 22 *Lycogala epidendrum* マメホコリ
 23 *Certiomyxa fruticulosa* var. *descendens* エダナシツノホコリ

第319例会 比良山麓観察・採集会

日時：1994年10月16日（日）晴

62名参加

場所：滋賀県志賀町 元気村

採集品リスト

- 1 *Schizophyllum commune* スエヒロタケ
 2 *Hygrophorus russula* サクラシメジ
 3 *Hygrophorus arbustivus* コクリノカサ
 4 *Lyophyllum shimeji* ホンシメジ
 5 *Lyophyllum semitale* スミヅメシメジ
 6 *Laccaria bicolor* オオキツネタケ
 7 *Laccaria vinaceoavellanea* カレバキツネタケ
 8 *Clitocybe* sp. カヤタケ属
 9 *Armillariella mellea* ナラタケ
 10 *Armillariella* sp. ナラタケ属
 11 *Omphalina epichysium* ヒダサカズキタケ
 12 *Marasmius pulcherripes* ハナオチバタケ
 13 *Mycena haematopoda* チシオタケ
 14 *Amanita pantherina* テングタケ
 15 *Amanita vaginata* var. *fulva* カバイロツルタケ
 16 *Amanita hemibapha* subsp. *hemibapha* タマゴタケ
 17 *Amanita longistriata* タマゴテングタケモドキ
 18 *Amanita spreata* ツルタケダマシ
 19 *Amanita virosa* ドクツルタケ
 20 *Amanita pseudoporphyria* コテングタケモドキ
 21 *Amanita citrina* var. *citrina* コタマゴテングタケ

- 22 *Amanita citrina* var. *grisea* クロコタマゴテングタケ
 23 *Amanita volvata* フクロツルタケ
 24 *Amanita rubescens* ガンタケ
 25 *Amanita spissa* ヘビキノコ
 26 *Amanita japonica* ハイロオニタケ
 27 *Amanita virgineoides* シロオニタケ
 28 *Amanita adrupta* タマシロオニタケ
 29 *Macrolepiota* sp. マントカラカサタケ
 30 *Leucocoprinus fragilissimus* キツネノハナガサ
 31 *Agaricus abruptibulbus* ウスキモリノカサ
 32 *Agaricus* sp. ハラタケ属
 33 *Coprinus atramentarius* ヒトヨタケ
 34 *Coprinus radians* コキララタケ
 35 *Psathyrella velutina* ムジナタケ
 36 *Pholiota highlandensis* ヤケアトツムタケ
 37 *Inocybe asterospora* カブラアセタケ
 38 *Cortinarius tenuipes* クリフウセンタケ
 39 *Cortinarius variegatus*? フジイロタケモドキ?
 40 *Cortinarius purpurascens* カワムラフウセンタケ
 41 *Cortinarius rubicundulus* イロガワリフウセンタケ
 42 *Cortinarius violaceus* ムラサキフウセンタケ
 43 *Cortinarius bovinus* サザナミツバフウセンタケ
 44 *Gymnopilus liquiritiae* チャツムタケ
 45 *Gymnopilus* sp. チャツムタケ属
 46 *Rhodophyllum murrayi* キイボガサタケ
 47 *Rhodophyllum crassipes* ウラベニホテイシメジ
 48 *Rhodophyllum nidorosus* コクサウラベニタケ
 49 *Rhodophyllum* sp. イッポンシメジ属
 50 *Chroogomphus rutilus* クギタケ
 51 *Strobilomyces confusus* オニイグチモドキ
 52 *Austroboletus gracilis* クリカワヤシイグチ
 53 *Boletellus emodensis* キクバナイグチ
 54 *Boletellus russellii* セイタカイグチ
 55 *Boletellus obscurecoccineus* ミヤマベニイグチ
 56 *Heimiella japonica* ベニイグチ
 57 *Suillus luteus* スメリイグチ
 58 *Suillus bovinus* アミタケ
 59 *Phylloporus bellus* キヒダタケ
 60 *Xerocomus nigromaculatus* クロアザアワタケ
 61 *Pulveroboletus ravenelii* キイロイグチ
 62 *Pulveroboletus auriflammeus* ハナガサイグチ
 63 *Aureoboletus thibetanus* スメリコウジタケ
 64 *Boletus reticulatus* ヤマドリタケモドキ
 65 *Boletus griseus* var. *fuscus* オオミノクロアワタケ
 66 *Boletus ornatipes* キアミアシイグチ
 67 *Boletus pseudocalopus* ニセアシベニイグチ
 68 *Boletus pulverulentus* イロガワリ
 69 *Boletus laetissimus* ダイダイイグチ
 70 *Boletus obscureumbrinus* オオコゲチャイグチ

71	<i>Tylopilus chromapes</i>	アケボノアワタケ
72	<i>Tylopilus eximius</i>	ウラグロニガイグチ
73	<i>Tylopilus neofelleus</i>	ニガイグチモドキ
74	<i>Tylopilus vinosobrunneus</i>	ブドウニガイグチ
75	<i>Tylopilus ballouii</i>	キニガイグチ
76	<i>Tylopilus nigerrimus</i>	モエギアミアシイグチ
77	<i>Russula nigricans</i>	クロハツ
78	<i>Russula rubescens</i>	イロガワリベニタケ
79	<i>Russula compacta</i>	アカカバイロタケ
80	<i>Russula laurocerasi</i>	クサハツモドキ
81	<i>Russula senecis</i>	オキナクサハツ
82	<i>Russula cyanoxantha</i>	カワリハツ
83	<i>Russula violeipes</i>	ケショウハツ
84	<i>Russula castanopsidis</i>	カレバハツ
85	<i>Russula lilacea</i>	ウスムラサキハツ
86	<i>Russula rosacea</i>	ヤブレベニタケ
87	<i>Russula emetica</i>	ドクベニタケ
88	<i>Russula sanguinea</i>	チシオハツ
89	<i>Lactarius subplinthogalus</i>	ヒロハウスズミチチタケ
90	<i>Lactarius gracilis</i>	アシボソチチタケ
91	<i>Lactarius quietus</i>	チョウジチチタケ
92	<i>Lactarius chrysorrheus</i>	キチチタケ
93	<i>Lactarius hatsudake</i>	ハツタケ
94	<i>Lactarius</i>	モチゲチチタケ?
95	<i>Cantharellus infundibuliformis</i>	ミキイロウスタケ
96	<i>Cantharellus luteocomus</i>	トキイロラッパタケ
97	<i>Cantharellus</i> sp.	アンズタケ属
98	<i>Clavicornia pyxidata</i>	フサヒメホウキタケ
99	<i>Ramaria botrytis</i>	ホウキタケ
100	<i>Ramaria ephemeroidea</i>	ウスカワホウキタケ
101	<i>Ramaria</i> sp.	ホウキタケ属 No. 1
102	<i>Ramaria</i> sp.	ホウキタケ属 No. 2
103	<i>Ramaria</i> sp.	ホウキタケ属 No. 3
104	<i>Hydnum repandum</i>	カノシタ
105	<i>Albatrellus confluens</i>	ニンギョウタケ
106	<i>Laetiporus sulphureus</i> var. <i>miniatus</i>	マスタケ
107	<i>Oligoporus tephroleucus</i>	オシロイタケ
108	<i>Coltricia perennis</i>	オツネンタケ
109	<i>Pycnoporus coccineus</i>	ヒイロタケ
110	<i>Lenzites betulina</i>	カイガラタケ
111	<i>Trametes orientalis</i>	クジラタケ
112	<i>Coriolus brevis</i>	ニクウスバタケ
112	<i>Daedaleopsis purpurea</i>	ミイロアマタケ
113	<i>Truncospora ochroleuca</i>	ウズラタケ
114	<i>Pseudocolus schellenbergiae</i>	サンコタケ (黄色型)
115	<i>Lycoperdon pyriformis</i> ?	タスキノチャブクロタケ?
116	<i>Calvatia craniiformis</i>	ノウタケ
117	<i>Tremella foliacea</i>	ハナビラニカワタケ

第320回例会 希望ヶ丘森林公園観察・採集会

日時：1994年1月6日(日) 小雨

45名参加

場所：滋賀県野洲郡野洲町

採集品リスト

1	<i>Pleurotus ostreatus</i>	ヒラタケ
2	<i>Pleurotus</i> sp.	ヒラタケ属
3	<i>Lentinus edodes</i>	シイタケ
4	<i>Laccaria bicolor</i>	オオキツネタケ
5	<i>Tricholoma ustale</i>	カキシメジ
6	<i>Collybia cookei</i>	タマツキカレバタケ
7	<i>Panellus stypticus</i>	ワサビタケ
8	<i>Marasmius crinisequi</i>	ウマノケタケ
9	<i>Marasmius scorodonius</i>	ニオイヒメホウライタケ
10	<i>Mycena amygdalina</i>	ニオイアシナガタケ
11	<i>Baeospora myosura</i>	ニセマツカサシメジ
12	<i>Leucocoprinus fragilissimus</i>	キツネノハナガサ
13	<i>Amanita pseudoporphyria</i>	コテングタケモドキ
14	<i>Amanita citrina</i> var. <i>citrina</i>	コタマゴテングタケ
15	<i>Pluteus atricapillus</i>	ウラベニガサ
16	<i>Agaricus abruptibulbus</i>	ウスキモリノカサ
17	<i>Agaricus</i> sp. No. 1	ハラタケ属
18	<i>Agaricus</i> sp. No. 2	ハラタケ属
19	<i>Psathyrella velutina</i>	ムジナタケ
20	<i>Naematoloma fasciculare</i>	ニガクリタケ
21	<i>Pholiota</i> sp.	スギタケ属
22	<i>Cortinarius bovinus</i>	サザナミツバフウセンタケ
23	<i>Gymnopilus liquiritiae</i>	チャツムタケ
24	<i>Rhodophyllus</i> sp.	イッポンシメジ属
25	<i>Gomphidius roseus</i>	オウギタケ
26	<i>Suillus luteus</i>	ヌメリイグチ
27	<i>Pulveroboletus pseudolignicola</i>	ザイモクイグチ近縁種
28	<i>Lactarius quietus</i>	チョウジチチタケ
29	<i>Lactarius hatsudake</i>	ハツタケ
30	<i>Plicaturopsis crispa</i>	チヂレタケ
31	<i>Cryptoporus volvatus</i>	ヒトクチタケ
32	<i>Oligoporus tephroleucus</i>	オシロイタケ
33	<i>Lenzites betulina</i>	カイガラタケ
34	<i>Bjerkandera adusta</i>	ヤケイロタケ
35	<i>Daedaleopsis purpurea</i>	ミイロアマタケ
36	<i>Elfvigia applanata</i>	コフキサルノコシカケ
37	<i>Pisolithus tinctorius</i>	コツブタケ
38	<i>Lycoperdon pyriforme</i>	タスキノチャブクロタケ
39	<i>Lycoperdon lisporus</i>	フタトゲホコリタケ
40	<i>Lycoperdon</i> sp.	ホコリタケ属
41	<i>Calvatia craniiformis</i>	ノウタケ
42	<i>Calvatia boninensis</i>	オオノウタケ
43	<i>Guepinia spathularia</i>	ツノマタタケ
44	<i>Ascocorynium vittelinum</i>	ヒメカンムリタケ

45 *Neolecta vittelina* ヒメカンムリタケ

46 *Helvella macropus* var. *macropus*
ナガエノチャワンタケ

第321回例会 スライド大会

日時：1994年12月11日（日）（10:00～16:00）

雨 57名参加

場所：京都市左京区田中神社

年末には少し早い12月11日の日曜日に、57名の談話会会員が例年のように左京区の田中神社に集まり、小林久泰氏の司会のもとに15名の会員のきのこや植物のスライドをさかかなに、楽しく年末の一日を過ごしました。下記に発表されたきのこの等の一部を挙げます（順不同）。

1. 池田晴美氏

ショウロと思ったきのこの断面（実はフクロツルタケであった）、カワラタケ、チョウセンゴミシ、イチイ、ザラエノハラタケ、アミタケ、ヌメリイグチ、ハナイグチ、モリノカレバタケ、ワタカラカサタケ、ベニハナイグチ、アイシメジ、コカブイヌシメジ、ヌメリツバタケ、ジャカシメジ、ベニヤマタケ、カラストケ、ヒイロチャワンタケ、クロカワ、他

2. 伊沢正名氏

胞子を放出するツチグリ、アカチシオタケ、ヤシマタケの未成熟～成熟した時期

3. 田中弘美氏

ホコリタケのいろいろ、ヒトヨタケの一種、ベニタケの一種、ウスキノセショウロのいろいろ

4. 佐野修治氏

オニカワウソタケ、エノキタケ、ツネノアミガサタケ（日本新産）、オオツルタケ、ヒメコナカブリツルタケ、マツオウジの幼菌、ヒラフスベ、クロヒメオニタケ、オオシロカラカサタケ、ナカグロモリノカサ、カンゾウタケ、きのこ展各コーナーの紹介、大きなサルノコシカケ類のきのこ、イロガワリベニタケ

5. 吉見昭一氏

クロトリュフ、イボセイヨウショウロ、アミメクロセイヨウショウロ、シロセイヨウショウロ、ツチダンゴ、アリタケ（コブガタアリタケ）、ウメムラセミタケ、ウンカハリタケ、ミカンイロクモタケ、クモノキイロツブムタケ、ハガクレシロツブタケと胞子、ギベルラタケと分生子、他

6. 森本繁雄氏

ペンション朴の木、コタマゴテングタケ、センボンイチメガサ、キツネタケ、クロラップタケ、シロヤマイグチ、ウスカワホウキタケ、ウスヒラタケ、アカキツネガサ、ヤナギマツタケ

7. 山手万知子氏

ニオイベニハツ、カブラマツタケのいろいろ、キツネノハナガサ、エノキタケ、クリタケ、ナガエノスギタケ、ミヤマテングタケ（仮称）、クロキツネノチャブクロ、ドクツルタケ

8. お名前不詳の方

コガネキヌカラカサタケのいろいろ

9. 松井英幸氏

八ヶ岳のきのこ；アズマタケ、ドクヤマドリタケ、オオダイアシベニイグチ、クロチチタケ、他

10. 井口 潔氏

キツネノサカズキ、ユズミノチャワンタケ、タマノリサカズキタケ（仮称、ニセビョウタケの一種）、ニセキンカクアカビョウタケ、アオノキノコヤドリタケ、ウスキサナギケ、ミヤマタンポタケ、イモムシハナヤスリタケ、コガネムシタンポタケ、マルミノアリタケ、オサムシタケ、他

11. 相良直彦氏

ナガエノスギタケ、アカヒメワカフサタケモドキ、他

12. 佐々木久雄氏

菌神社、フユヤマタケ、アカキツネガサ、チャヒラタケ、ハラタケ属の一種、フウセンタケ属の一種、ムラサキシメジ、ホンシメジ、クロカワ、他

13. 杉山信夫氏

ヒメクチキタンポタケ、オサムシタケ、オサムシタンポタケ、アブラゼミタケ、ホネタケ、他

14. 本多澄夫氏

シモコシ、クリタケ、スギから出るクリタケ、ナガミノシジミタケ、トンビマイタケ、フジイロアマタケ、ウスキノコガサタケ、アカヒダカラカサタケ、キヌカラカサタケ、アシボソトマヤタケ、アケボノオシロイタケ、オオカボチャタケ、エゾハリタケ、ノウタケ、キクメタケ、アカショウロ、ツチダンゴ、ジャガイモタケ

15. 下野義人氏

クロハツ、オオシロカラカサタケ、アカモミタケ、クリタケ、*Amanita ochreate*（前出のミヤマテングタケ、信州ではミヤマタマゴテングタケ、他の地方ではミヤマタマゴタケと呼ばれている大型のテングタケ属の一種）

関西菌類談話会 1995年度総会（第322回例会）報告

日 時 1995年2月5日（日）14：00～15：30

場 所 同志社女子大学デントン館 地下1階

司 会 佐々木久雄氏

出席者 32名

1. 開会の辞 佐々木久雄氏
2. 開会挨拶 小原弘之会長
3. 議長選出 会長が杉山信夫氏に委嘱
4. 書記選出 議長が松井英幸氏に委嘱
5. 議事

A：報告事項

①事務局からの報告（総務幹事 上田俊穂氏）

1. 1994年度の会員数について

1993年度末の会員数 559名

1994年度中の入会者数 38名

1994年度中の退会者数 26名

1994年度中の除籍者数 38名

1994年度末の会員数 533名

兵庫県南部の会員の方々の連絡先が大地震によって
はっきりしなくなっている。

消息を知っている方は、是非事務局に知らせてほしい。

2. 会員宛の郵便物の発送

会報15号、1994年度行事予定表、シンポジウム案内、
乗鞍高原観察採集会案内、きのこ展案内、会費請求書
類、総会と講演会案内

3. 役員会を3回開催し、主に次の事を検討した。

分類学講座・シンポジウムの内容/乗鞍高原観察採集
会関係/第四回きのこ展の基本構想/第322回例会（総会
と講演会）の具体案/1995年度の事業について/次年度
の役員人事について等

②1994年度事業報告

1. 1994年度行事報告（庶務幹事 下野義人氏）

第312回例会 5月5日（日） 分類学講座（第19回）「顕
微鏡の使い方（入門編）」講師：古見昭
一氏、北岸阿佐子氏。場所：京都橘女子
高等学校。参加者：29名

第313回例会 6月18日（土）シンポジウム：テーマ「シ
イタケの新しい栽培技術」。講師と演題：
新しいシイタケ菌床栽培（渡辺和夫氏）、
長野県におけるシイタケ菌床栽培（小出
博志氏）、固型培地を用いたシイタケ菌床
栽培法（伊藤 武氏）、きのこの抗酸化作
用（額田真喜子氏）。場所：同志社女子大
学デントン館。参加者：38名

第314回例会 7月10日（日）観察採集会。場所：奈良
県橿原市橿原神宮境内林。参加者：47名
65種採集

第315回例会 7月24日（日）観察採集会。場所：京都
府宇治市興聖寺裏山（大吉山）。参加者：
38名 36種採集

第316回例会 8月20日（土）～8月23日（火）観察採集
会。場所：長野県乗鞍高原。参加者：80
名 141種採集

第317回例会 9月4日（日）観察採集会。場所：兵庫
県芦屋市奥池。参加者：41名 23種採集

第318回例会 9月16日（金）～9月18日（日）きのこ展。
場所：京都市京都府立植物園。詳細は後
述

第319回例会 10月16日（日）観察採集会。場所：滋賀
県志賀町元気村。参加者：62名 121種
採集

第320回例会 11月6日（日）観察採集会。場所：滋賀県
野洲町。希望が丘森林公園。参加者：45
名 43種採集

第321回例会 12月11日（日）スライド映写会。場所：
京都市左京区田中神社弘安殿。参加者57
名

第322回例会 1995年2月5日（日）総会と講演会。参
加者32名

2. きのこ展の報告（きのこ展実行委員長 古見昭一氏）

期間：9月16日（金）～9月18日（日）

場所：京都府立植物園 展示室（京都市左京区下鴨）
入場者数：約1500名

展示標本数：308種

実行委員会：第1回6/5、第2回7/17、第3回8/17

協力会員数：3日間でのべ82名

講演会：9/16 森本肇氏 きのこの栽培。9/17 上田
俊穂氏 きのこの不思議。9/18 横山和正
氏 毒きのこに気をつけよう

異常気象で京都など地元ではきのこが少なかった
が、長野県、奈良県、広島県などからのきのこの提
供、伊沢正名氏のきのこ曼荼羅の出展、および多数
の会員の協力で盛大なきのこ展となった。

3. 会報編集委員会報告（編集委員長 森本繁雄氏）

会報 No. 15を編集・発行した。No. 16は春過ぎの
発行を予定している。次号からは新編集委員長のも
とで発行する。

4. 1994年度会計報告（会計幹事 北岸阿佐子氏）

[収入の部]

(単位：円)

	予算額	決算額
繰越金	471,844	471,844
会場収入	1,000,000	1,052,000

会場収入	30,000	29,024
雑収入	20,000	14,854
収入合計	1,521,844	1,568,676
通信費	410,000	400,290
事務費（一般）	80,000	36,258
事務費（人件費）	40,000	5,000
会場費	50,000	6,466
会議費	50,000	13,648
印刷コピー代	50,000	0
謝礼	80,000	11,120
会報印刷費	450,000	280,160
会報刊行諸経費	50,000	50,000
振替手数料	2,000	245
調査費	50,000	50,000
雑支出	10,000	515
予備費	99,844	0
事業準備金	100,000	100,000
支出合計	1,521,844	953,702

〔繰越〕 614,974

（別途に事業準備金として、904,000の定額貯金）

5. 1994年度会計監査報告（会計監査 伊勢信子氏）

1994年度会計報告が正しいことを認めた。

以上、「A. 報告事項」は全て承認された。

B：審議事項

1. 1995年度役員の紹介（会長 小原弘之氏）

（敬称略・順不同）

会 長：横山和正（新任）

副 会 長：占見昭一

総務幹事：上田俊穂

会計幹事：北岸阿佐子，松井英幸

庶務幹事：下野義人，衣田雅人

運営幹事：大野典英，熊田俊夫，小林久泰（新任），
佐々木久雄，杉山信夫（新任），鈴木雄一，橋屋 誠，藤田博美，丸本龍二，森本繁雄，森本 肇

会計監査：伊勢信子，西田富士夫

編集委員長：佐々木久雄（新任）

編集委員：岩瀬剛二，佐野修治，鈴木雄一，田中千尋，橋屋 誠，丸西靖恵，森本繁雄

任 期：1995年2月5日～1996年度総会の日まで
当日，一部役員の紹介もれがあり事務局より謝罪の表明があった。後日（5月13日）の役員会で事後措置を検討し，上記の通り確認された。

2. 1995年度行事計画（庶務幹事 下野義人氏）

第323回例会 5月7日（日）分類学講座（第20回）

場所：京都橘女子高等学校。内容：顕微鏡の使い方：長さの測定等。講師：占見昭一氏，北岸阿佐子氏

第324回例会 6月18日（日）シンポジウム。テーマ，

演題，演者未定。場所：滋賀大学教育学部 大会議室

第325回例会 7月9日（日）観察採集会。奈良県橿原神宮

第326回例会 7月23日（日）観察採集会。宇治市興聖寺裏山（大吉山）

第327回例会 8月19日（土）～8月22日（火）観察採集会。長野県八ヶ岳山麓原村。

第328回例会 9月3日（日）観察採集会。奈良市方面（詳しくは後日連絡）

第329回例会 10月15日（日）観察採集会。滋賀県比良山麓

第330回例会 11月5日（日）観察採集会。京都市北区宝ヶ池周辺

第331回例会 12月10日（日）スライド映写会。田中神社弘安殿。

第332回例会 1996年2月10日（土）総会と講演会。同志社女子大学デントン館

以上の内容で承認された。

3. 1995年度会報発行計画（編集委員長 佐々木久雄氏）

前年度分16号および今年度分17,18号を16ページたてで発行したい。

上記の通り承認された。

4. 1995年度会計予算（会計幹事 北岸阿佐子氏）

〔収入の部〕

（単位：円）

繰越金	614,974
会費収入	1,000,000
会場収入	20,000
雑収入	20,000
収入合計	1,654,974
通信費	450,000
事務費（一般）	80,000
事務費（人件費）	40,000
会場費	50,000
会議費	50,000
印刷コピー代	20,000
謝礼	100,000
会報印刷費	450,000
会報刊行諸経費	50,000
振替手数料	2,000
調査費	50,000
雑支出	10,000
予備費	102,974
事業準備金	200,000
支出合計	1,521,844

以上の内容が提案され，賛成多数で承認された。

6. 閉会挨拶 横山和正会長

7. 閉会の辞 佐々木久雄氏

関西菌類談話会会報投稿案内

1. 投稿は原則として本会会員に限ります。
2. 原稿の採否、掲載の順序は編集委員会の決定にお任せ下さい。
3. 編集委員会は、著者の原稿中の字句、表、図、写真などのスタイルの統一や変更を求めることがあります。文章の用法上、あるいは、文法上の誤り、その他の修正は編集委員会にお任せください。
4. 原稿には表題、著者名、本文の他に必要なら引用文献（あるいは参考文献）をあげてください。
5. 別紙に著者名、連絡先、住所、電話番号を書いて添付して下さい。
6. 著者校正は初校だけとし、2日以内に原稿正本とともに速達郵便で返送してください。
7. 掲載された原稿はお返ししませんが、図・写真に限り著者校正のときにお返しします。
8. 写真製版料実費は著者の負担とします。
9. 原稿は会報編集長宛にお送りください。

～皆様の投稿をお待ちしております～

- ◇ かびやきのこに関する記事、図、本誌に関するご意見などをお寄せください。
- ◇ 図は黒インクで、少し大きめ（刷り上がりの約1.5倍）にお書きください。（ボールペンは不可です）
- ◇ 原稿の分量は400字づつめ原稿用紙4～5枚程度としますが、1枚でも半分でも結構です。
- ◇ 写真の掲載を希望される方は、編集委員長におたずねください。
- ◇ 原稿宛て先

〒520-23 滋賀県野洲郡野洲町栄37-3

関西菌類談話会会報編集委員長

佐々木久雄

TEL. 0775-87-5288

編集委員：岩瀬 剛二、鈴木 雄一、田中千尋、
橋屋 誠、丸西 靖恵、森本 繁雄
佐野 修治（順不同）

カット：丸西 靖恵

表紙によせて

ホンシメジ *Lyophyllum shimeiji*

最近このキノコもめったにお目にかからなくなってきました。

考えてみるとマツタケよりも貴重かもしれません。

和歌山県、中辺路町の雑木林で見つけたときは久しぶりにあった恋人のような感じがしてしばらく見とれていました。そして我に帰ったときは味覚を楽しんでいました。

F 値：16 シャッタースピード：4秒 レンズ：50mm マクロ

編集後記

また悪い癖が出てしまったと、この会報の編集を始めて思った。YESかNOかという場面になると、自分に力量もないのにエイヤッと引き受けてしまって後悔するのだ。編集委員長なんて出来っこないのにと、自分の無謀さに呆れている。しかし、やるしかない、ようやく17号の発行に漕ぎ着けることができた。早くから原稿をお寄せいただいた著者の皆さんには、会報の発行が大幅に遅れたことをお詫びします。18号も引き続き編集にかかり、早期発行を目指しますので会員各位のご協力をお願いしたい。（佐々木）

関西菌類談話会会報 No. 17

1996年1月29日 印刷

1996年1月30日 発行

編集 関西菌類談話会会報編集委員会

発行 関西菌類談話会

発行所 関西菌類談話会

事務局 〒567 大阪府茨木市春日2-1-2

大阪府立春日丘高等学校

上田 俊穂 方

郵便振替口座 00950-0-83129

印刷所 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入る